

## 会員新刊紹介

### 大井田晴彦著

#### 『竹取物語―現代語訳対照・索引付』

#### 上原作和・安藤徹・外山敦子編

#### 『かくや姫と絵巻の世界』

#### ―一冊で読む竹取物語 訳注付』

二〇一二年に刊行された『竹取物語』の訳注付テキスト二冊である。

成蹊大学図書館蔵古活字十行本を底本とする『竹取物語―現代語訳対照・索引付』の特長は、最新の注釈書としての充実と文章や構成の「読みやすさ」が両立していることである。

原文と現代語訳が二段組で示され、各段落ごとに校異、語釈、補注、鑑賞が置かれる。語釈や補注には、典拠や他作品との影響関係をはじめ、研究史の中で積み上げられてきたものと著者が掘り起こしたものが詰まっただけで、改めて学ぶこと、気づかされることも多かった。歴史や文学史との関わりなど、近年の研究成果を踏まえて著者の知見が示される鑑賞や解説も読み応えがある。

解説の後ろには、参考文献、付録(仏典・漢籍・伝承・物語などの参考資料)、自立語索引が収められている。

付録の参考資料に、作品および当該箇所との関連についての解説が添えられることが嬉しい。各場面に配されている版本(茨城多左衛門版)の挿画、カバーに使用した絵巻(国立国会図書館本)など絵についても言及が欲しかった。

『かくや姫と絵巻の世界―一冊で読む竹取物語 訳注付』は、書名の通り、「絵巻」に焦点が当てられている。

全体の構成として、原文・絵、補注、現代語訳、詞書翻刻、解説、構図比較一覧の順に置かれているが、原文、現代語訳、解説を示す前半と「絵巻」の絵、詞書翻刻、構図比較一覧を示す後半を分けるような構成でも良かったのではないか。意図があつてのものではあろうが、少し構成が入り組んでいる印象を持った。

本文・注釈編では、新井本を底本とした古本系統の原文と脚注の間に、各場面に対応する東京大学国文学室蔵『竹取物語』をフルカラー・見開きで収録しており、鮮やかな彩色で描かれた登場人物の表情など細部まで見て取ることが出来る。各図についていた詞書の翻刻、主な絵巻十本との場面・構図を比較した一覧表も「絵巻」研究を行うにあたって重要な資料となるだろう。また、

「絵巻」部分のみならず、本文、現代語訳にも力が入れられており、これまででない新しさが全体に強く志向された特色あるテキストである。

両書とも、美しさ、読みやすさ、充実した内容を備えながら、学生や一般読者にも手に取りやすい値段に抑えていることは特筆すべき点である。広く読まれることを願いながら丁寧に作られた両書は、今後、研究・教育の場で長く使用されることになるだろう。

△二〇一二年十一月刊、笠間書院、A5判、一九七頁、

一、四〇〇円＋税

△二〇一二年十月刊、武蔵野書院、A5判、一九九頁、

一、五〇〇円＋税

(東望歩・岐阜聖徳学園大学)

## 瀬崎圭二著

### 『海辺の恋と日本人ひと夏の物語と近代』

思わず節つきで口ずさみたくなる書名を持つ本書は、正にそうした日本人の心性がいかにして成り立ってきたのかを、文学や映画を主たる対象として論じたものだ。

本書は「はじめ」に冒頭に、六章および「おわりに」からなり、概ね時代順に「海」をめぐる表現を追っている。各章の概要を見よう。

1章「物語の発生―夏の海辺と出会い」では、健康法として西洋より移入された海水浴が、身体的快楽を伴いつつも、明治二十年代には早くも女性の身体への欲望と切り離せない物語が立ち上がりつつあったことを、漱石や子規の文章、江見水蔭の小説などを例に論じている。

2章「明治後期の海辺の物語―口絵と演劇に見るイメージ」では、「金色夜叉」「不如帰」などを中心に、演劇化されたそれらが今日の我々が抱くものに近似したロマチック・ドラマチック・センチメンタルな海のイメージを広めていったことが述べられる。

3章「私たちの海辺―文学作品から感性を読む」では、主として漱石の後期三部作に出てくる海辺の光景の分析

を通して、ホモソーシャルな関係が表象される「海辺」が、前章までに論じられた異性愛的なロマンチックな場である「海辺」の裏返しであること、そして漱石はそれを描きつつもそうした磁場から距離を取っていることなどが語られる。

続く4章「映画・スポーツと〈肉体〉——大正期のまなざし」では、明治期の「海」において欲望の対象となった海辺の女性の身体表象が大正期においてどのように変化したかが論じられていく。映画女優の身体や西洋の彫刻をモデル＝理想とし、それを実現するスポーツとしての水泳に注目しているのである。

5章「不良から太陽族へ——海辺と〈アメリカ〉」からは戦後の海をめぐる話題となっていく。大正期に現れた海辺での出会いを求める「不良」達が、戦後にアメリカ文化と「太陽の季節」の影響を経て「太陽族」という表象が作り出されていく様子や、「太陽の季節」の身体性と映画表現の親和性などが論じられていく。

6章「カリフォルニアと南の島——イメージとしての一九八〇年代」では、海辺のアメリカンなイメージがどのように消費されていたかが、雑誌『POPEYE』や片岡義男の小説、鈴木英人のイラスト、松本隆の歌詞などの多様な海辺をめぐる表現の分析を通じて検証される。

「おわりに——性差の反転と日常」では、女性の身体への欲望が織り込まれた海辺の物語が女性表現者によって描かれることで動揺する様や、ここまで論じられた海をめぐる感性が我々の日常に深く浸透していることなど通して、我々を引きつける「海辺の引力」が論じられる。それにしても、八月の酷暑の中で本書の紹介を書いていると、なんとも心が海に誘われるものである。

二〇一三年八月刊、青弓社、四六判、二四四頁、

一、六〇〇円＋税

(永井真平・名古屋大学文学研究科博士研究員)

## 神野志 隆光 著

### 『万葉集をどう読むか』

#### — 歌の「発見」と漢字世界 —

(シリーズ リベラル・アーツ)

『万葉集をどう読むか』という表題の、「読む」主体とは一体誰なのだろう。著者の、読者としてのひとつの読みの提示なのだとすれば、なるほど、そういう読み方もあるのかと納得するばかりである。本書の構成は以下の通り。

はじめに／Ⅰ漢字世界のなかの歌 一漢字世界のなかの歌と「歌集」／Ⅱ万葉集の「歴史」世界 二「歴史」としての『万葉集』— 卷一、二がつくるもの、三「歴史」の磁場— 卷三、四、六をめぐる、四私情を含む「歴史」世界、五歌の環境— 卷五について／Ⅲ歌の世界のひろがり 六歌の世界のひろがりと成熟、七東歌と防人歌— 列島をおおう定型短歌、八歌の可能性の追求、九編集された家持— 歌の世界を体現する「歌日記」／おわりに— 固有の言語世界という擬制を離れて／あとがき

東京大学教養学部における二〇〇九年度冬学期の授業

「方法基礎・テキスト分析」での講義内容をふまえたもの（「あとがき」とあるので、私が受講生であったら質問したかった内容をいくつか挙げて、本の紹介に代えたいと思う）。

本文中には、『万葉集』の「歴史」世界」という語句が頻繁に登場する。「『万葉集』が、歌の世界を「歴史」的に構築し、律令国家における歌のひろがりとその可能性を開示してみせ」る（263頁）と捉えるのであるが、かかる見方は何によって保証されるのだろうか。序に天武天皇詔を契機に成り立ったと記す『古事記』とは異なり、『万葉集』がどのような書であるかはテキスト内部に示されていない。確かに、巻一や巻二では天皇代の標目下に歌が配されるなど、万葉集の一部においては万葉集の「歴史」世界が展開されているようにも見える。ただ、柿本人麻呂の相聞歌を、「私的な領域まで歌がひらいてカバ―し、組み込んでしまふ、そうしたありようを、『万葉集』の「歴史」世界の構築として見るべきなのです。」（101頁）とするように、一部の巻に見られるそれを集全体に広げることが、著者が手厳しく批判する『万葉集』の内部にあらわれた徴証によって組み立てられた仮説」に対する「予定調和」（「はじめに」）になりはしないか。

また、万葉集卷一に「(天武) 天皇幸于吉野宮時御製歌」と題された「淑人乃良跡吉見而好常言師芳野吉見与良人四来三」(二七番歌)という一首がある。左注には「紀曰 八年己卯五月庚辰朔甲申幸于吉野宮」とあり、『日本書紀』にはこの日の吉野行幸と翌日の吉野盟約に関する記事が載る。従来の研究では、紀の記事をふまえてこの歌を解釈するのだが、著者は、「『日本書紀』とはべつに、歌にそくして『万葉集』の天武天皇として読むべきです。引用されない会盟記事を、共有される言語外文脈として読むことは適切とはいえません。」(43頁)と、テキスト外の情報を切り離す。けれどもその一方で、歌の解釈においては、『毛詩』や鄭玄注をふまえて読みを展開していく。漢籍における語句の意味をふまえた解釈が有効なのは、当時の読者たちに共有されたであろう知識・教養を前提とするからである。もしこの方法を是とするならば、紀の記事をふまえて読もうとする立場を否定することはできないのでないか。左注に示された「八年己卯五月庚辰朔甲申」の日付から当時の知識人は吉野盟約を想起したはずだ、とも考え得るためである。

近現代の文学作品と異なり、『万葉集』などの古典文学作品はいま見るそれと同じものとしてあったという保証はない。『万葉集』については、伊藤博が論じたよう

に、卷一・二と卷十六まで、卷十七以降と明らかに質が異なっているし、写本によっては、卷十六以降の目録を持たないものもある。これまでの構造論、形成論、編纂論の動機は、当時の『万葉集』への飽くなき探求であった。「万葉集をどう読むか」という問いが、もし二十一世紀のある読者が、二十一世紀の万葉集をどう読んでみせるか、ということであるとしたら、古典文学研究の意義はどこにあるのだろう。もちろん、我々が八世紀の万葉集やその読者を想定してみると、それほど不確かなことではないのだけれども。編者が見た万葉集がどのようなものであり、そのテキストの中で歌は当時の読者にどう読まれたのかを問うことが、万葉集を読むことであると私は考えるのであるが、実は本書の歌の読み方については、『毛詩』の例に表れるように、そうした立場と大きくは異ならないのかもしれない。

二〇一三年九月刊、東京大学出版、A5判、二九六頁、

三、〇〇〇円＋税

(新沢典子・鶴見大学)

## 沖森卓也 編著・齋藤文俊・山本真吾 著

### 『漢文資料を読む』

(日本語ライブラリー)

学術書・大学教科書出版社の老舗・朝倉書店から刊行された。本書は全15講と巻末付録からなり、第9・12・14講のあとにはコラムが挿入されている。

はじめに／第1講 漢文訓読とその方法／第2講 漢文助字の訓法／第3講 漢文表現の訓法／第4講 日本漢字音の体系／第5講 漢文の修辭法／第6講 漢詩を読む／第7講 和化漢文の世界／第8講 日本漢文を読む／第9講 史書・伝記を読む／第10講 説話を読む／第11講 古記録を読む／第12講 近世日本漢文を読む／第13講 近代日本漢文を読む／第14講 和刻本で読む／第15講 ヲコト点で読む／影印資料一覧・ヲコト点図資料／平仄の規則／参考文献／索引

第5講より内容の一斑を示すと、まず「漢文の修辭法／典故／比喩／対句／対句の句形／四六駢儷文」の順に基礎知識を解説し、つぎに実践力の涵養をねらいとした課題漢文、さいごに応用力の習得をねらいとした句形を

問う練習問題が布置されている。総体として専門的かつ高度な内容だが、初学者向けに工夫された簡要な解説と懇切な脚注が付され、通読すれば和漢の漢文資料を広く網羅しうる。

本書は漢文学習を志した時期がおそく我流に偏りがちであった稿者から見れば、もっとも渴望していた恰好の入門書で、これから本書をひもとく初学者への羨望を感じなくもない。

課題漢文と練習問題には編著者により精選された和漢の漢文資料が収められ、脚光を浴びる機会が乏しかった日本漢文にいたるまで幅広く採録された意義は大きい。学習者は資料一つ一つの味読を通して、際限なく拡散する合わせ鏡の鏡像のような、漢文世界の奥行きを深さを体感するにちがいない。

本書の試みは漢文学習そのものが敬遠されがちな昨今における、状況打開の一つの可能性を示唆しているように。概説書として通読することももちろん可能であるし、参考文献や索引などの巻末付録を介して幾通りにも活用できよう。教材としての枠を超えて永く架蔵されるにふさわしい良書である。

二〇一三年十月五日刊、朝倉書店、A5判、一六〇頁、

二、七〇〇円＋税

(松尾護兒・名古屋大学博士研究員)

山梨正明・吉村公宏

堀江薫・初山洋介編

李在鎬・村尾治彦

浅尾仁彦・奥垣内健著

『認知日本語学講座第2巻』

認知音韻・形態論』

本書は、『認知日本語学講座』（全7巻刊行予定）の第2巻である。

編者によれば、『認知日本語学講座』は「認知言語学の方法論と研究法を、主に日本語の具体的な分析に適用した研究書のシリーズとして企画」され、「日本語以外の言語現象も考察の対象とし」たものである。認知言語学の研究書には、欧米の言語分析を中心とした内容のものが多い。一方で、本講座は日本語以外の言語も対象としつつ、主に日本語の分析を中心としたシリーズであるという特徴をもつ。現時点においてはシリーズ第2巻の他に、第7巻『認知歴史言語学』が刊行されている。

シリーズ第2巻の本書は認知言語学の最新の研究成果を踏まえ、日本語の音韻・形態論、さらには語彙論、構文論に関わる様々な現象を考察したものである。

これまでも認知言語学の観点から日本語の音韻・形態論について分析した研究書は出版されている。しかし、それら研究書の出版からは「すでに10年以上が経過」しており、最新の研究成果を踏まえた上での事例の分析が求められているという。「まえがき」では、認知言語学の観点から音韻論や形態論について考察している既刊書に対し、本書の「特筆すべき点」として2点挙げられている。1点目は「音韻論や形態論の基礎としての古典的な言語分析に関しても詳細で綿密な説明を試みている」という点、2点目は「音韻・形態論に関わる関連現象を幅広く扱っている」という点である。

本書は次の全5章から成る。

第1章 認知音韻論

第2章 認知形態論

第3章 認知形態論から語彙論へ

第4章 認知語彙論

第5章 総括と展望

各章について詳しく紹介することはできないが、「まえがき」にもあるように、各章では「ネットワーク分析、構文文法、フレーム意味論、意味地図分析など、認知言語学の最新の研究成果」を積極的に取り入れ、事例の分析と考察を行っている。また、第4章では認知言語学の

新たな潮流として「コーパス言語学の知見に基づく考察」を行うなど、いずれの内容も興味深いものである。

本書は認知音韻・形態論の理論的背景、そして、どのような分析を具体的にを行っているのかについて丁寧に解説し、さらに、音韻・形態論と関連する問題についても幅広く取り上げて具体的な考察を試みるなど、「理論と事例分析のバランス」に配慮したものとなっている。

このように、日本語の音韻・形態論の研究の発展に寄与するであろう新たな知見を盛り込んだ本書は、日本語学や言語学等の研究者はもとより、言葉に関心を持つ多くの読者にも一読をすすめたい一冊である。

△二〇一三年十一月二十五日刊、くろしお出版、A5判、

二二六頁、三、二〇〇円＋税

(長澤理恵・名古屋短期大学非常勤講師)

## 杉山洋介 著

### 『〇×チェックでみるみるわかる 教養のある日本語』

#### 教養のない日本語』

本書の書名にある「教養のある日本語」とは、「多く人が好感を持っているはずの『しかるべき教養のある人たち』が妥当だと認め、使いこなしている一連の表現」のことである。本書は、そのような表現について、問題形式で取り上げる。そして、その問題を解いていくことで、日本語に対する理解を深め、日常の言葉遣いを豊かなものにするができるよう構成されている。

本書の内容は、以下のとおりである。

第1章 ちょっと不思議な日本語

第2章 ちょっと難しい言葉の意味を知ろう

第3章 使い方に注意したい表現

第4章 似た意味の言葉の使い分け

「第1章 ちょっと不思議な日本語」では、普段使われている表現の中から、なぜそのような意味を持つに至っ

たのか分かりにくいものを取り上げる。例えば、「天気になる」という表現がなぜ「晴れる」という意味を表すのか、「口がかたい」の反対の意味がなぜ「口が軽い」と表されるのかなど、読者の興味を引きやすい身近な表現が並ぶ。

「第2章 ちょっと難しい言葉の意味を知ろう」では、よく耳にする言葉の正確な意味を学習することができる。例えば、「沽券にかかわる」の「沽券」の意味など慣用語に関わる表現や、「インセンティブ」「コンプライアンス」など外来語も取り上げられている。

「第3章 使い方に注意したい表現」では、間違えやすい四字熟語や慣用語の他、あいまい表現や敬語の使い方についても取り上げる。

「第4章 似た意味の言葉の使い分け」では、意味や形式の似た表現の厳密な使い分けを知ることができる。例えば、「冷める」と「冷える」、「残る」と「余る」、「おさなり」と「なおざり」などの違いを考えながら、日本語についての知識を深めることができる。

以上の内容について、八〇問の問題が設定されているのだが、本書の特徴は、全てが選択問題である点である。間違った日本語表現を誤答として選択肢に示すことで、正答と誤答を比較しながら、日本語を多角的に観察でき

る工夫がなされている。さらに、著者の専門分野である  
認知言語学・意味論の視点からも、様々な日本語表現に  
説明が加えられており、他の一般向け実用書とは一線を  
画す充実した知識を得ることができる。

本書が扱うのは、生活に密着した日本語表現であり、  
あらゆる人が楽しめる面白さがある。自分の日本語を豊  
かにしたい、日本語を様々な角度から見直したいと考  
える人に、是非勧めたい良著である。

△二〇一三年十一月二十六日刊、技術評論社、四六判、

一九二頁、一、二八〇円＋税

(小出祥子・梶山女学園大学非常勤講師)

## 藤井隆著

### 『私のあゆんだ道』

——和本ひと筋七十年——

本書は、名古屋大学国文学科三回生である藤井隆氏  
(名古屋市立大学名誉教授)の回想録であり、同じく修  
了生の田中登・長坂成行両氏により、まとめられたもの  
である。

回想は昭和九年(一九三四)第一室戸台風の記憶より  
始まり、一九年の動員の話へと移る。藤井氏は当時、一  
五糶榴弾砲の弾丸を運んだ際に木炭車の荷台木枠に火が  
燃え移り、砲弾をすべて畑へ投げ落として事なきを得た  
という。そして、時習館高校時代の久曾伸昇氏の講義や  
最初の古書購入の話から、名古屋大学入学後の話題へと  
続く。その後も、身分不安定な非常勤講師・助手時代、  
創設・拡充期の煩雑な仕事に追われた帝塚山短大時代か  
ら名古屋市立大学教授時代、豊橋市美術館館長就任  
期の順に、新制大学の始動とともに幕を開けた藤井氏の  
研究生活が、氏と関わりがあった人や本を中心に、写真  
とともに詳細に語られてゆく。当時を知る人には記憶を  
呼び覚まされる部分があるうし、遙か後に生まれた者に

は、環境の違いに驚く点が多い一方で、氏がどのような状況下でも軽やかに継続的に成果を公刊し、古書を収集し、新たな研究対象と向き合った事実、ただただ圧倒されるであろう。

藤井氏のご研究は御伽草子・古筆切・書誌学・郷土史を柱として多岐に渡るため、本書も広汎な内容を持ち、到底、限られた字数の中で紹介しきれものではない。以下では、特に東海地方の個人文庫とご著書に関わる部分について少しばかり述べたい。

古書の移動にまつわる話題は、多くの場合は閉じられた関係性において口伝のようになり、消えゆく性質を持つのではない。それだけに、本書で愛知と岐阜の二、三の個人文庫の誕生と形成やこれらをめぐる愛知の古書肆・藤園堂の活躍が藤井氏の記憶を元に語られ、併せて「メモ」として古書肆回想録やごく近年の名古屋の古書情報誌の記事が転載されたのは、多くの研究者にとり益するものであろう。

そして書中に紹介されるご著書を見渡す時、改めて藤井氏の仕事、広く後進の助けとなっていることに気づかされる。共著の『国文学古筆切入門』シリーズ、『物語和歌総覧』『増訂校本風葉和歌集』、そして刷ごとに改訂を重ね、現在九刷にもなる『日本古典書誌学総説』や、

御伽草子研究の基本文献のうち、入手が困難になりつつある昭和二〇年以前刊行のものを藤井氏自身が選定した『御伽草子研究叢書』などである。私自身も、博士後期課程在籍中に中山美石うまし（一七七五～一八四八）関連資料を拝見に伺った際には、美石以外にも和本の修理方法やお勧めの表具屋など、たくさんのお話を教示いただき、のちには美石資料の調査のため、紹介状もいただいた。また、名古屋国文学研究会に対しては、『風葉和歌集』のため、ご所蔵注釈新出本の調査をお許しくださった。個人文庫をめぐる逸話の紹介にも見るように、藤井氏による積極的な整理と公開により、知の共有化が進められたことは明らかである。

藤井氏は今後、『中世古典の書誌学的研究』の続編やご所蔵本解題（本書の「藤井文庫展観目録テーマ一覧」からもその内容には期待される）、『東三河文化人事典』を出版のご予定という。ますますのご健筆をお祈り申し上げます。

二〇一三年二月十日刊、和泉書院、A5判、  
一三二頁、一、八〇〇円＋税

（玉田沙織・名古屋学院大学任期制講師）

## 犬飼隆・和田明美 編

### 『語り継ぐ古代の文字文化』

二〇一四年一月四日から二月十六日まで、名古屋博物館で「文字のチカラ―古代東海の文字世界―」（名古屋博物館・愛知県立大学・愛知大学・文化庁主催、名古屋市立大学連携）が開催された。本書はこの展示にちなんで編まれたものであり、東海地方に関連する論考を多く収載する点に特色がある。編者の犬飼隆氏は「七世紀から八世紀はじめの東海地方は、地政学的な条件と、東アジアの動乱が日本にも影響した条件とから、特色のある歴史をたどりました」「都との人的、物的交流が盛んに行われるなかで、文字によるコミュニケーションの方法と、文字を使って表現する文化とが、ともなって東海地方に came しました」と述べる。本書には、当時から重要な地域であった古代東海地方の話題を中心に、九本の論考と一本のコラムが収載されている。

全体は二部構成となっており、前編「文字が語る古代の東海」では東海地方の社会や文化について、後編「文字が伝える古代日本」では天皇制度、古代文獻、和歌表現等について、古代の文字資料を用いて論じられている。

具体的な構成は次の通り。

はじめに

I 文字が語る古代の東海

「紫」を名にもつ美濃の人たち

― 古代の近江・飛鳥と美濃・尾張・三河との交流 ―

流 ―

正税帳が語る尾張の古代社会

「尾張国造」木簡と書状の世界

『和名類聚抄』にみる東海の古代地名（北川和秀）

（コラム）文化財のチカラ（加藤和俊）

II 文字が伝える古代日本

過去の支配―天皇制度の成立と『日本書紀』―

古事記の素材―「国記」再論―（吉田一彦）

声と文字の時空―文字の力とうた―（榎英一）

『紀州本萬葉集』について（岩下武彦）

持統太上天皇三河行幸と万葉歌（片山武）

― 高市黒人の「漕ぎ廻み行きし棚無し小舟」―

（和田明美）

あとがき（和田明美）

あとがき（和田明美）

古代の社会・文化・言語等について研究する上で常に問題となるのは、現代まで残る文字資料の少なさである。七世紀から八世紀は文字資料が出現しはじめる時期であり、利用できる資料は極めて少ない。そのため、古代を扱う研究者たちは、ごく限られた資料から最大限に情報を引き出し、合理的な仮説を立てなければならぬ。本書冒頭の犬飼氏の言葉を借りれば、文字資料はデジタル的であり、「一つ一つの漢字や、漢字の列にこめられた情報は、しかるべき手続きをとることによってはじめてアナログに変換され、人が認識できるように」なる。その手続きこそ、漢字で記された資料の解読・解釈である。限られた文字資料をいかに解読・解釈するか、そしてそこからどのような仮説を導き出すかが、それぞれの研究者の腕の見せ所といえる。それと同時に、この作業こそが、古代に関する研究の魅力であろう。本書の執筆者は古代日本史、古代日本語、古代日本文学の専門家と多岐にわたるが、いずれも、この魅力を伝えるに十分な論考となっている。古代の文字資料の価値と魅力を伝える、良書である。

二〇一四年一月四日刊、青簡舎、四六版、二二〇頁、

一、九〇〇円＋税

（阿部裕・名古屋大学院博士課程後期課程）

## 深津睦夫著

### 『光厳天皇』

著者は大学院時代の一年後輩である。後藤重郎先生の下で、ともに中世和歌研究に机を並べた。たぶん、昭和五三年のことだったと思うが、網野善彦先生が『国史学』の大学院演習で『花園院宸記』を読んでおられた。深津氏に誘われて、二人で無謀にもこの演習に参加した。

「あとがき」の言ではないが、「古文書や古記録の読み方を正統的に学んではない」私ども（いや、私）は、毎週の講義に付いていくのに青息吐息だった。文学を専門とする私どもは、日記や記録も作品として読んでしまう。しかし、この演習で、『花園院宸記』を史的資料として読む方法を学んだ。深津氏は、その時以来、『花園院宸記』を、その他の日記や記録類を、さらには文学作品を、作品として、史的資料として、両面から丹念に読み込んで、南北朝期の和歌について刺激的論考を発表してきた。本書もその深津学の濃密な成果の一著である。

光厳天皇は、二度帝位に就き、治天の君として十数年に亘って政務を司ったにもかかわらず、「現在の皇統譜においては歴代に数えられておらず、北朝第一代の天皇」

(はしがき) という異例の扱いを受けている。絶対的存在である天皇は唯一人の存在である。にもかかわらず、南朝と北朝という二つの帝位が併存した異常な時代、この時代を自ら作り出し、自ら収束させるべく積極的に行動したのは後醍醐天皇であった。この後醍醐天皇とは対照的に、押し寄せる動乱の波に翻弄されながら、皇統の継承者として生きたのが、光厳天皇だった。

光厳天皇は、持明院統の正嫡、帝位の正統な継承者として誕生し、父後伏見院と叔父花園院によって、帝王学を授けられて皇太子となり、後醍醐天皇から確かに譲位され、帝位に就いた。わずか二年足らずだったが、唯一の天皇であった。隠岐から復帰した後醍醐天皇がこの二年間を消し去って、自らが帝位に在り続けたと宣言したところから、光厳天皇の数奇な運命は始まった。しかし、帝位を奪われても、太上天皇となった光厳院は、皇統の継承者として、後醍醐天皇が吉野に移り、京に天皇が不在になると、光明天皇を即位させ、治天の君となり、懸命に政務を執り、勅撰集も編纂した。南朝方に連れ去られ、賀名生に幽閉された時も、出家して常照寺に隠棲した後も、皇統の継承者として生き続けた。

本書はこの光厳天皇像を見事に描き出した。「貴種として生まれ、生涯にわたってその責任を果たそうと努め

つつ、一人の人間としても見事に生を全うした人」と評した結語がよくそれを表している。光厳天皇の代表的な評伝として、深津氏は、岩佐美代子『光厳院御集全釈』(風間書房 二〇〇〇)と、飯倉晴武『地獄を二度見た天皇 光厳院』(吉川弘文館 二〇〇二)の二著を挙げ、それを踏まえつつ、文芸作品の中に史料を読み、史料を作品として読む、独自の手法で、新たな光厳天皇像にたどり着いている。中でも、「第七章 貞和五年・光厳院の目」は他者の追隨を許さない。

△二〇一四年二月十日刊、ミネルヴァ書房、四六判、  
二九六頁、三、二〇〇円＋税  
(安田徳子・岐阜聖徳学園大学名誉教授)

## 市瀬雅之・城崎陽子・村瀬憲夫著

### 『万葉集編纂構想論』

『万葉集』を誰がいつどのように編纂し、成立したのかという問題は、平安時代以来論じられてきた問題であり、最終段階において大伴家持が関わっていることについては現在定説となっているが、未だ解明されていない部分も多く残されている。万葉集編纂研究は伊藤博士の『萬葉集の構造と成立』に代表される一連の構造論的視点に立った形成成立論によって一つの到達点を迎えた。本書は、その後の万葉集編纂研究に「構想論」という新たな方向性を指し示す書である。伊藤氏らの編纂成立論が『万葉集』の構造や編纂に用いられた資料を分析し、形成過程を解明することに重点を置いたのに対して、本書が重視するのは『万葉集』二十巻全体を一つの編纂物として捉え、そのテキストの現態（現在ある姿）から編纂の「構想」―二十巻を編み、形作るための志向、その志向を支える理念や理想、主題―を見るところである。その趣旨に基づき、三人の論者がそれぞれの手法を用いて論を展開している。

市瀬雅之氏（第二部「構造論から構想論へ」）は、『万

葉集』が各々の巻内での「構想」によって編纂されていると同時に、巻々の間をつなぐ「構想」に基づいて編集されているとの視点から、それらの「構想」の詳細についての解明を試みる。これまで複数の異質資料のつなぎ合わせとされてきた巻に一つの「構想」があることを明らかにするとともに、従来の構造論が形式・内容等から構造上の断絶を認めてきた巻々の間をつなぐ「構想」を見出し、延いてはそれが二十巻全体に及ぶものであることを示す。

城崎陽子氏（第三部「部類歌巻の編纂と構想」）は、これまで作者が付されていないことから「作者未詳歌巻」と通称されてきた巻々（巻七・十・十一・十二・十三・十四）を、様々な歌の事情を払拭し、歌の様式や表現によって歌を部類した「部類歌巻」として捉え、歌だけを見つめてそれを部類するという行為が『万葉集』におけるどのような「構想」（志向）に基づくものかを考察する。

村瀬憲夫氏（第四部「構想論・構造論・歌人論」）は、第一章においては、特異な様相を呈する巻六巻末部を取り上げ、編者家持という前提をいったん外して、個々の具体的な事象から見えてくる「構想」によって巻六の編者の特定、家持であるとすればその関わりの度合いの推

定を試みる。第二章、第三章においては、これまで「家持の歌日記」とも言われてきた『万葉集』の末四卷（巻十七〜二十）を取り上げ、そこに一貫する「家持」（主  
題化された「家持」）の「構想」を具体的事例を通して  
読み解く。そして何れの論においても、その「構想」は  
従来の構造論・歌人論（家持論）と矛盾するものではな  
く、むしろそれらの成果が「構想」を支持するものであ  
ることを確認する。

本書がこれからの万葉集編纂研究に一石を投じる書で  
あるの言うまでもない。

△二〇一四年二月二十八日刊、笠間書院、A5判、

四二八頁、一、〇〇〇円十税〈

（眞野道子・名古屋大学非常勤講師）

## 阿部泰郎・伊藤信博編

### 『酒飯論絵巻』の世界

―日仏共同研究（アジア遊学172）―

二〇一二年十一月二十三日〜二十五日の三日間、名古屋大学及び西尾市岩瀬文庫において、国際シンポジウム「フランス国立図書館蔵『酒飯論絵巻』をめぐる」が開催された。この研究集会は、二〇〇九年九月に始まった「フランス国立図書館本写本室やフランス国内に所蔵される江戸時代における日本物語絵写本」研究プロジェクトのメンバーを中心に行われた。フランス、アメリカなど内外の研究者により、フランス国立図書館蔵『酒飯論絵巻』を、人類学、民俗学、美術史、文学、歴史などの多様な研究視座から読み解こうとする目的で企画された日仏共同研究プロジェクトであり、本書はその報告書である。

『酒飯論絵巻』は十六世紀中葉頃、狩野元信とその工房により製作された。酒好きの公家、飯を好む僧侶、酒も飯も程々がよいと中庸を重んじる武士がそれぞれの自説を展開し、優劣を争うというストーリーを持つ。詞は七五調の和文で展開され、宗論にまで発展する。飲食・

調理・宴会の情景が丹念に描かれており、室町時代と江戸時代の過渡期に制作されたこの絵巻は、江戸における新たな表象文化誕生を導いた重要な資料といえる

本書の構成は、以下の通りである。

I テクストとしての『酒飯論絵巻』

・小峰和明『『酒飯論絵巻』を読む』

―イメージの〈饗宴〉―

・石川透『《コラム》異本『酒飯論』の存在』

・土谷真紀「狩野派における『酒飯論絵巻』の位相

―文化庁本を中心に―

・増尾伸一郎『『酒飯論絵巻』の詞書と『和漢朗詠集』

―典拠をめぐる試論―

II 『酒飯論絵巻』をめぐるエクリチュール

・伊藤信博『『酒飯論絵巻』に描かれる食物について』

・畑有紀「食物本草からみる描かれた食物

―『酒飯論絵巻』から錦絵まで―

・三好俊徳「宗論からみる『酒飯論絵巻』の特徴

―第四段詞書を中心に―

III 十六世紀：変動する世界／時代

・高谷知佳『『酒飯論絵巻』の時代の都市社会』

・ポーメール・ニコラ『《コラム》下り酒と中世紀のポルドーワイン』

・ワタナベ・タケシ『『酒飯論絵巻』から見た遊びの世界』

・ヴェロニック・ベランジェ「フランス国立図書館写本室蔵『酒飯論絵巻』について」

・ヴェロニック・ベランジェ『『酒飯論絵巻』伝本リスト』

総括と展望

・阿部泰郎『『酒飯論絵巻』の達成―その世界像と思惟をめぐる―』

本論集について阿部泰郎氏が「中世日本の絵巻という一箇の世界像をあらわすテクストをめぐる、人文学研究の『知の興宴』というべき成果を提示している。」と述べられるように、一つの絵巻を巡る多分野の議論が深められた魅力的な内容になっている。フランス国立図書館本が文化庁本より詳細に食を描く点、描かれる食物をどの様に捉えるのか、詞書の古典援用や七五調で記される点、美術史研究による再考察など、新たな研究視点も含め、この絵巻の位置付けを考察する。

様々な切り口から『酒飯論絵巻』を通して中世日本を

味わえる、正に「興宴」という語が相応しい一冊である。

二〇一四年三月二十日刊、勉強出版、A五版、一八三頁、

一、〇〇〇円＋税）

（菊間美帆・名古屋大学大学院博士課程後期課程）